

古典文法の学習参考書を読む

—— 古典文法研究者の立場から ——

小田 勝

一 はじめに

名著の誉れ高い古文の学習参考書である、小西甚一著『古文研究法』が復刊された（ちくま学芸文庫、二〇一五年）ので、学生時代以来久しぶりに再読したところ、古典文法について、気になる箇所が二三目についていた。元来著名な本であったが、文庫化されたことで、信頼のおける古文の学習書として、より一層普及するだろう。高等学校の古文教師への影響も大きいと思う。このような本が、古典文法の立場から首肯しかねる記述に何の注記も施さないままで復刊されたことを遺憾に思う。^①

学習参考書、とりわけ受験用の参考書は、大学入試を突破するための実用書であり、学問的な知見を反映しなくても免責されるのか

もしれないが、極めて多くの若者が真剣に読むものであり（二〇一四年度のセンター試験受験者は約五十三万人である）、また多くの人にとって古典文法を学ぶのはこの受験勉強時が最後である。プロの国語教師や国文学の研究者であっても、この時に学んだ古典文法の力からそれほど出ない者もあるいはいるのではなかと推察される（もちろん杞憂であることを冀う）。^②まさに古文参考書の影響は甚大であり、その社会的責任も大きいというべきである。本稿は、現在流通している古典文法の学習参考書の記述について、古典文法研究者の立場から論評するものである。

二 敬語について

小西^③で最も気になった点は、所謂謙讓語（謙讓語Ⅰ・補語尊敬

語)の扱いである。小西は、「旧説に従って処理する」と断っているが、

1 「粟田殿が姫君ヲ」かしづききこえたまふほどに(地の文)について、「きこえ」を「粟田殿から姫君への敬意」と説明している(三八八〜三八九頁)。現在これは「作者から姫君への敬意」と説明されているところであり、そう考えるべきであろう。謙讓語(謙讓語Ⅰ・補語尊敬語)において、「文の主語から補語への敬意」を表すと考えると、

2 「蜂が太政大臣宗輔ヲ」刺し奉ることせざりけり。(今鏡)¹⁾
3 あが君を取り奉りたらむ、人にまれ鬼にまれ、返し奉れ。(源氏物語・蜻蛉)

において、2の「奉る」は「蜂から太政大臣への敬意」、3の「奉る」は「人であれ鬼であれ、何であれ」という不定のモノから「あが君」への敬意」を表しているということになり、これはまことに奇妙な理解というべきであるし、次例の「奉る」では敬意の主体がないことになってしまう。

4 神武天皇をはじめ奉りて、当代まで六十八代にぞならせ給にける。(大鏡)

謙讓語(謙讓語Ⅰ・補語尊敬語)については、草土②に、「謙讓語」というのは、その動作をする人(ここでは家族)を低めることに

よって間接的に動作を受ける相手(ここでは父)に敬意を表す敬語です。」という記述がみえる(四二二頁)。これも、古文の場合、単に補語に対して敬意を表すと考えるべきであって(話し手・書き手が、である)、「主語を低める」とは考えない方がよい。

5 「帝ハ」一の宮を見奉らせ給ふにも(源氏物語・桐壺)において、「帝を低める」ということは古典語の敬語体系上考えにくいことである。また前例2や4について、2を「蜂を低めること」によって、結果的に太政大臣を高める」と考えるのは奇妙な考え方というべきであるし、4では「低める」べき主体がない。

敬語に助動詞「る・らる」が承接した形式については、次のような説明が多く見られる。

①「(ら)れ+給ふ」の「る・らる」は、「尊敬」ではない。(富井⑥六一頁、仲⑧八一頁、皆吉⑨五〇頁、村井⑩六一頁、望月⑪一〇七頁、望月⑫一八〇頁)
②「敬語動詞+(ら)る」の「る・らる」は、必ず「尊敬」である。

・「る・らる」の上に「敬語」があるとします。その場合、「る・らる」の意味は絶対に「尊敬」になるんです。(富井⑥五九頁)

・「尊敬語+る・尊敬語+らる」も95%「尊敬」です。(荻野

①一八七頁)

③「仰せらる」の「らる」は、必ず「尊敬」である。

・「仰せらる」の「らる」は、必ず尊敬！ 「仰せらる」の

「らる」も入試問題によく登場します。(望月⑩一〇八頁)

・「仰せらる」の「らる」は、必ず「尊敬」。(仲⑧八一頁)

しかし、①は事実であるが、②は中古では事実に戻し、③は結果的にはその通りであるにせよ相当悩ましい問題が存するのである。

まず②について。これに該当する形式は「思さる」や「御覽せらる」であろう。このうち、「御覽せらる」の「らる」は、中古では、

8 「乳母ノ」子どもはいと見苦しと思ひて、「乳母ハ」背き

ぬる世の去りがたきやうに、みづからひそみ(≡自分カラ泣

顔ヨククツテ)「源氏ニ」御覽せられ給ふ」と、つきしろひ

目くはす。(源氏物語・夕顔)

のようには「きり」と「受身」であって、「尊敬」ではない(8の傍

線部は、「上位者(源氏)が「御覧になる」ことを下位者(乳母)

がありたい恩恵として受ける」の意で、「御覧になっていただく」

と現代語訳される。「御覧ず」は源氏に対する敬意。なお下の「給

ふ」は乳母に対する敬意である。「侍り」は主語尊敬語に下接しな

いので、次例は、「御覧せらる」が主語尊敬語ではない証拠である。

9 大臣(≡源氏ハ)、「思し捨つまじきを頼みにて、「明石姫君

ノ」なめげなる姿を、進み御覽せられ侍るなり(≡見テイタ

ダイタノデス)。…「秋好中宮ニ」聞こえ給ふ。(源氏

物語・梅枝)

「思さる」についても、

「おぼす」「おぼしめす」に付いた「る」が尊敬になるのは中

世以降で、平安時代の用例では尊敬にはならない。(『旺文社

全訳古語辞典 第四版』「る」の項)

と考えるべきである。中古では「思す」と「思さる」、「思しめす

と「思しめさる」の敬意はそれぞれ同程度であって、「る」が尊敬

の意を添えているとは考えにくい上、そもそも非常に軽い敬語であ

る「る」が最高敬語「おぼしめす」に付属してその敬意を増強する

という考え方自体受け入れ難い。中古和文中の「思さる」「思しめ

さる」の「る」は自発か受身か可能であって、実際の用例は自発の

場合が圧倒的に多い。

③は結果的にはその通りのだが、問題の所在は、次のようであ

る。

i 中古の「仰す」は敬語動詞ではなく、「命ずる」の意の通常

語である(その証拠に、「あるべきことも仰せ給ふ」(源氏

物語・濡標)のように、「仰す」には尊敬の補助動詞「給ふ」

が付く。

ii 中古の「仰せらる」は最高敬語に属する極めて敬意の高い敬語である。

iii 「仰す」が通常語であり(i)、「仰せらる」が最高敬語である(ii)ということは、「仰せらる」の極めて高い敬意は「らる」がもたらしていると考えなくてはならない。

iv しかし、中古の「らる」は非常に敬意の低い敬語である。

このiiiとivの矛盾は、次のように考えることによって説明される。枕草子や源氏物語などの用法はいわゆる最高敬語に属するが、そのような作品では「らる」の敬意は一般に低いから、「仰せらる」の「らる」は本来受身であって、命ぜられる、仰せ言を受ける意の、下位者を主体とした言い方であったものを、発令者の発言一般に押し及ぼして高い敬意の語としたと考えられる。(小学館『古語大辞典』「おほす」の項)

したがって、

平安中期までの「おほせらる」については、命じる意の「おほす」に受身の助動詞「る」が付いた形として解する事も可能であり(東京大学出版会『古語大鑑①』「おおせらる」の項)

ということになるわけである。したがって、

中古の「おほせらる」についてはそれで一語に相当する尊敬語と認めたい。(『ベネッセ古語辞典』「おほせらる」の項)

「仰せらる」で一語として扱う。(谷島⑬一四六頁)

というのが最も適切な取り扱いということになる。このような次第であるから、中古の「仰せらる」の「らる」に傍線を引いてその文法的意味を問う入試問題は出題しないよう提言したい(答えが決められないから)。同様に、前述のように、「思さる」の「る」の文法的意味を問う問題を出題することも適切ではない。これについて、古文参考書の中には、次のように正確な記述をしているものもみえる(ただし、谷島⑬は「中古では」という限定の一言が欲しい)。

・尊敬「る(らる)」は他の尊敬語を重ねて、「れ給ふ」「られ給ふ」「思さる」「御覽せらる」などと用いることはない。つまり「る(らる)」が尊敬の意になる時は他の尊敬語を併用しないのである。(谷島⑬五一〜五二頁、二三二頁にも同趣の説明がある)

・平安時代、「る」・「らる」は原則として、他の尊敬語といっしょには尊敬の意にはならないんだ。

∴れ給ふ ∴れ給ふ おぼさる 御覽せらる
などの「る・らる」は平安時代では《尊敬》とはほとんどならないんだ。唯一の例外が「仰せらる」だが、普通は一語の尊敬語として扱う。(栗原⑬九四頁)

下二段「給ふ」は、左に示すように、大学受験の世界では「ます」

と訳す、ということになっていらい。⁽⁶⁾

・謙譲の下二段の補助動詞「給ふ」は、「します」と訳すと押さえておくのが無難でしょう。(望月⁽⁷⁾Ⅱ九頁)

・下二段「給ふ」の性質 (5) 訳出します (谷島⁽⁸⁾Ⅲ一九五頁、二一八頁)

・訳出は丁寧語的な補助動詞のみであり、「す・マス」ぐらいが適当になる。(鳥光⁽⁹⁾二七五頁)

古典敬語について、次のような説明は、あまりにもひどい。⁽⁷⁾

・尊敬語とは、「より位の高い人」が「より位の低い人」に向かって及ぼす動作をいいます。謙譲語はまったく逆で、「より位の低い人」が「より位の高い人」に向かってする動作のことです。(荻野⁽¹⁰⁾一七八頁。傍線部は原文太字)

敬語について、その他気づいた諸点を簡条書きに示す。

・「大臣、姫に文を書き奉り給ひ侍り。」(望月⁽¹¹⁾Ⅱ八四頁)という作例は、説明のための方便であるとしても、やはり抵抗がある(中古の「侍り」は通常尊敬語に付かないので、「給ひ侍り」とはいわない)。

・望月⁽¹²⁾に「謙譲語の「給ふ」が「思ひ分く(＝分別する)」のよくな複合動詞(二一つの動詞がくっついて一つになったもの)に付く時は、「思ひたまへわく」と、中に割って入ります。尊敬語の

「給ふ」なら、「思ひわきたまふ」と下にくっつきますからね。」

(Ⅱ一〇一頁) というが、尊敬の「給ふ」でも普通は「思ひたまへわく」(または「おぼしわく」となるのである(複合動詞の尊敬語形は、通常上の動詞を敬語形にする。「思ひわきたまふ」のような形も皆無ではない)が)。

・小西⁽¹³⁾に「天皇関係の尊敬表現は、よく最高敬語とよばれるが、これは尊敬のときだけあり、謙譲のときは、最低謙譲? などというものは存在しない。」(三一四～三二五頁)とあるが、「奉らず」「聞こえさす」「参らず」などは、謙譲語の(つまり所謂受け手尊敬の)最高敬語である。

・草土⁽¹⁴⁾は「賜はす」について、「尊敬の動詞「給ふ」に助動詞「す」がついて敬意を強めた最高敬語です。よく使われる組み合わせなので、これで一語とする説もあります。」(一六〇頁)とするが、一語とするのは「よく使われる組み合わせ」だからではなく、助動詞なら種々の動詞に付くはずのところ、尊敬の「(よ)す」に上接する語はごくわずかな語に限られているためである。

・谷島⁽¹⁵⁾に「せさせ給ふ」の「せ」は必ず動詞となり、使役の助動詞「す」に尊敬の助動詞「さす」をつけることは語法上できないのである。(一八三頁)とあるが、事実ではない(「小兵衛といふ人にまねばせて聞かせさせ給へば」枕草子、など)。

三 助動詞について

推量の助動詞が下接する「つ」「ぬ」について、一律に「強意(確述)」とする説明が大変多くみられる(例えば望月⑩ I 六三～六五頁)が、強意(確述)の「つ」「ぬ」というのは推量の助動詞が下にあることによって成立しているのではなく、「つ」「ぬ」が現実の事態に用いられて、確実にそうなるだろうという気持ちを表すとき、それを「強意(確述)」という用語で説明しているのである(この場合の「つ」「ぬ」は「: : た」「: : てしまった」と訳出できない)。したがって、推量の助動詞が下接していても、

10 「何に、ありのままに聞こえつらむ。: : 」と悔しう思ひるたり。(源氏物語・夕霧)

のように事態が既実現の場合は「完了+推量(てしまったのだろう)」なのであって、これを「きつと(確かに) : : に違いない」のように理解することは当たらない。

「まし」について、小西④に、

相手が来てくれるかどうかは、よくわからない。しかし「もし来てもらえるなら: : 。」と仮想して「そのときは、さぞうれいことでしょう。」と、自分の気持ちまで仮の条件の上に想定

するわけ。(中略) そこで返事には、(中略)「参れるかどうかわかりませんが、もし参れましたら: : 。」と仮想しているのである。中古文なら、

「訪ひたまはましかば、いとうれしかりなまし。」

「え参らましかば、させましかし。」

となる。(二六一～二六二頁)

とあるが、「訪ひたまはましかば、いとうれしかりなまし。」は、「相手が来てくれるかどうかは、よくわからない」のではなく、「来てくれたなら嬉しかったろうが、実際は来なかつたので悲しい」という意である。二文目の「え参らましかば」という否定のない可能の「え: : 」というの中古文としては奇妙である(上代には存するが。「え行きて泊てむ」万葉集・二〇九)。

助動詞について、その他気づいた諸点を箇条書きにして示す。

・小西④で、「人の言ふらむことをまねぶらむよ。」の「らむ」を「柔らげ」としているが(二七〇～二七一頁)、今日では通常「不確かな伝聞」と理解されている(二七三頁の「けむ」も同様である)。

・草土②は、「めり」の文法的意味を「様態」「婉曲」とするが(一三〇頁)、「様態」という用語はいかがであろうか。

・荻野①で、「よき人の、男につきて下りて住みけるなり。」(土佐

日記)の「なり」を「伝聞推定」としているが(一三二一〜一三三三頁)、断定であろう(中古の「き」「けり」には推量の助動詞が下接することがない)。

・望月⑫に「我、今朝パンを食ひき。」という作例があるが(一五三頁)、この文は中古文としては非文である(中古の「き」は発話当日中の過去を表すことができない。この場合は「食ひつ」になる)。

・「ざりなむ」(望月⑫II二三三頁)という作例があるが、この語形は存在しないのではないか。

・「古文においては「窓が壊されている」などという無生物主語の受身表現は用いないのが原則」(谷島⑬五一頁)は、事実にあらずる(拙著『実例詳解古典文法総覧』(和泉書院、二〇一五年)九七頁参照)。

四 助詞についで

同格構文の説明として、よく、

僧の経などよむが参りけり。(望月⑪一九七頁)

のような作例を見かけるが、標準的な文語文法では、「―が参りけり(終止形)」という句型は存在しないので、このような作例の提

示には注意が必要である(「僧」の経などよむゆゑ、参りけり。)のよう
にすべきである)。また、望月⑫は、

いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て…

のような例文を使って、同格を「主格の変則」(I一七一頁)、「主格と同格は形の上では一緒」(I一七四頁)のように説明しているが、そうすると、

12 いと尊き僧のあひ知りて侍るに、言ひ語らひつけ侍りぬる。

(源氏物語・夕顔)

のような句型が説明できないのではないだろうか(この場合は「いと尊き僧ヲあひ知りて侍る」という格関係である)。

副助詞「だに」の説明として、望月⑫に、

小学生だに解く。

> (まして)

大人は当然解く。

という図を掲げて、「ここでは、小学生という軽いものをあげて、大人という重いものが当然解けるということを「だに」が類推させているんですね」という説明がある(I二二〇頁)。このような、

「軽いものをあげて、重いものを類推させる」という説明は、現代語の「さえ」についてもよく言われることであり、この説明法は望月⑫の責任ではないが、どうして「小学生が解く」ことが「軽いこ

と」なのだろう（両者の体重を比べているわけでもあるまい）。大人よりも小学生が解くことの方が「大変なこと」である。「だに」にしろ、現代語の「さえ」にしろ、「軽いものをあげて他を類推させる」という説明がよくなされているが、これは「極端な事物をあげて、他を類推させる」とか、もっと正確に言うなら、「集合内の同類の事物の中で最も実現可能性が低い事物にその事態が成立していることをあげて、その他の事物でも成立することを類推させる」のように説明すべきではなからうか。なお、小西④に「だに」と「すら」は、中古語では、ちゃんと使い分けがある。」とあるが（二九五頁）、「上代語では」である（中古語ではふつう「すら」は用いられない）。

小西⑤は、「がな」を願望を表す助詞とし、「上に助詞「も」あるいは「し」が加わるのを原則とする」（三三二～三三三頁）という。富井⑥も「がな」のオトモダチ」として、

↓ もがな ↓ もが ↓ もがも ↓ がも
 がな ↓ てしがな ↓ てしが ↓ てしか
 ↓ にしがな ↓ にしが ↓ にしか

のような表をあげている。しかし、願望の助詞の本体は「もが」なのであって、「がな」は「願望の終助詞「もがな」が、「もーがな」と意識され、分離してできたもの」（小学館『古語大辞典』「がな

の語誌欄）なのである。「しか」の系列は、恐らく「か」は清音であり、この「がな」とは直接関係のある語ではないと思われる。

草土②に、係助詞の起源を説明して、

強調を表す「ぞ・なむ（なん）」や疑問・反語を表す「や・か」は本来文末に置かれていたのですが、倒置法によって目立たせようとして文中に上げられ、上にあった「本来の題目の部分」が文末に位置するようになった。（六二頁）

という大野晋の係り結び倒置起源説を挙げているが、「なむ（なん）」だけは文末性が無く、「なむ（なん）」だけはこの説が成立しない（「なむ（古形は「なも」）…連体形」の起源は今のところ不明である）。

助詞について、その他気づいた諸点を簡条書きにして示す。

・鳥光⑦の一三三頁に「ーもぞ（もこそ）」已然形」という句型表示がある。同じものが三箇所も掲示されているから誤植ではないようだが、改めたい。

・草土②は、「いはく」について「四段動詞「いふ」の未然形「いは」に、助詞の「く」（ことを意味する）がついて、いうこと（には）という意味になったものです。」（六七頁）というが、「く」は助詞ではなく、接尾語（接尾辞）と説明すべきであろう。

五 形容詞について

形容詞について、気づいた諸点を簡条書きにして示す。

- ・形容詞の未然形について、鳥光⑦は、形容詞では「○／から」（ク活用）、「○／しから」（シク活用）のように本活用の未然形を認めていない（四九頁）のに、形容詞型活用の助動詞（まほし・たし・べし・まじ・ごとし）はすべて「（べく）／べから」のように本活用の未然形が括弧書きになっている（八〇頁）のは、記述が一貫していない。

・草土②の「さるべき」について「もともととは、「然るべし」という形容詞の連体形ですが」（二二七頁）というが、「然るべし」は形容詞ではなく連語である。

六 おわりに

以上、現在流通している古典文法の学習参考書の記述について、古典文法研究者の立場から気づいた諸点を述べた。筆者は前に高校生向けの古典文法副教材について調査・検討したが、古典文法について、高等学校で、また大学受験時にどのような教え方がなされて

いるかを知ることが、大学における古典文法教育を効果的なものにする上で必要な作業であると考ええる。両者を比較すれば、やはり学習参考書の方に、問題のある記述が目立つようである。正確な知識の伝授ではなく、大学入試を通過させるための著作であると聞き直ればそれまでであるが、その大きな影響力を考えれば、学習参考書として、免責されるものではないであろう。

言及した学習参考書

- ① 荻野文子『マドンナ古文 パワーアップ版』学研教育出版、二〇一三年
- ② 草土力『古文入門 読解と演習²³』Z会出版、二〇〇五年
- ③ 栗原隆『ボーダーを超える古文』駿台文庫、一九九七年
- ④ 小西甚一『古文の読解』ちくま学芸文庫、二〇一〇年
- ⑤ 小西甚一『古文研究法』ちくま学芸文庫、二〇一五年
- ⑥ 富井健二『富井の古典文法をはじめからいねいに「改訂版」』ナガセ、二〇一四年
- ⑦ 鳥光宏^{よつゝ}『鳥光宏の楽々古典文法』文英堂、二〇〇六年
- ⑧ 仲光雄『必携古典文法ハンドブック』Z会、二〇一一年
- ⑨ 皆吉淳延『夢をかなえる古典文法』開拓社、二〇一三年

⑩村井玲子『古文入門59のおきて』開拓社、一九九七年

⑪望月光『望月光の古文教室 古典文法編 改訂版』旺文社、二〇一四年

⑫望月光『古典文法講義の実況中継 改訂第3版』I・II二冊、語学春秋社、二〇一五年

⑬谷島康敬『古文解釈詳解10のレッスン』開拓社、二〇一二年

注

(1) 例えば江川泰一郎『英文法の基礎』(一九五六年)は、二〇一四年に復刊された際、葉袋善郎が現在の立場から記述を補正する注を加えている。

(2) 拙稿「私家集全釈叢書」を読む―古典文法研究の立場から―

『岐阜聖徳学園大学国語国文学』三四、二〇一五年)参照。

(3) 以下、学習参考書は著者の姓と「言及した学習参考書」に一覧にして示した丸数字をもって示す。

(4) 用例は以下の本文による。今鏡(講談社学術文庫)、大鏡(日本古典文学大系)、源氏物語(新編日本古典文学全集)、枕草子・万葉集(新日本古典文学大系)。なお引用にあたり、表記は私に改めた。

(5) 本稿執筆中の二〇一五年二月五日、大久保一男「源氏物語の「思さる」という講演(國學院大學国語研究会平成二十七年後期大会講演)があり、源氏物語(桐壺く幻)の地の文において、「思す」も「思さる」も最高位である帝・院から大臣家を出自とする人々にまで等しく用いられていて、両者で身分差がないことが明証された。例えば葵上や玉鬘に「思さる」を用いた例もあるし、桐壺院や朱雀院に「思す」を用いた例もある、ということである。

(6) 村井⑩には「謙讓「給ふ」の現代語訳は「くテオリマス」(一四一頁)とある。

(7) 「源氏の君は、「父帝」御あたり去り給はぬを」(源氏物語・桐壺)のような反例を一々あげるまでもあるまい。ただこの本、奥付によれば、重刷79回にも及んでいる(初版48刷、改訂版27刷、パワーアップ版4刷発行とある)。受験のための参考書ならどんなことを書いても良い、というわけではあるまいと思う。

(8) 岡崎正継「万葉集の「すら」「だに」の意味用法について」(『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』二四、一九九三年)は、上代の「すら」の意味について、「なさそうな事態が、予期に反して、ある、という意を表す」とする。

(9) 『日本国語大辞典「第2版」』は、「がな」を「願望を表わす

終助詞「が」に、詠嘆の終助詞「な」の付いてできたものと説明し（補注には、語源的には、疑問の係助詞「か」に詠嘆の終助詞「な」の添ったものともいうとある）、「もがーな」の異分析ではなく、願望を表す助詞「が」に直接「な」が付いてきたように読める。同書では「がも」も同様に、「願望を表わす終助詞「が」に詠嘆を表わす助詞「も」が付いてできたもの」、「常に助詞「も」を伴って、「もがも」の形で用いられ」とあって、これはこれで記述は一貫しているが、「もがも」の項では「もがーも」と語構成を表示して、「終助詞「もが」「も」の重なったもの。↓もが」とある。「がも」の説明を採れば「もがも」という捉え方になるはずで、「がも」の記述と「もがも」の記述は一貫していない。

(10) 拙稿「高校生向け古典文法書における文法用語・文法説明のゆれについて」(『岐阜聖徳学園大学国語国文学』三三、二〇一四年)